

要旨

小学校家庭科の生活時間授業の検証 －生活時間調査の再構築と活用－

弘前大学大学院地域社会研究科

15GR103 小野 恭子

家庭科教育では自立した生活者の育成を目指している。そのため自分の生活を客観視し、問題点を見つけ、課題解決していくことが求められる。生活を客観視する一つの方法として、生活行動を数値化できる生活時間に着目した。小学校家庭科での「生活時間」の学習は、1時間単位での生活行動を記録した記録用紙を利用し、家族と一緒に過ごす時間や家族の為に使う時間に注目し課題解決学習が行なわれている、しかし小学校でも時間的資源の大切さに気付き、自分の生活を考えたり、生活地域の特徴を捉えたりするなど、自分の生活を改善する学習が可能であると考えた。

全国的な生活時間調査では小学生の地域別・季節別の集計はなく、行動分類も異なる。地域別・季節別の比較を行なうことや家族の就業スタイルによる影響を明らかにすることで、より詳細な小学生の生活実態を明らかにすることができると考えた。また小学校家庭科の授業実践では、性別役割分業に気付かせる実践はあるが、時間を生活資源として考えたり、自分の生活する地域を理解したりすることには注目していない。しかし小学生から自分の生活を客観視し生活資源として捉えたり生活している地域を理解したりすることで、自立した生活者を育成することにつながると考えた。

そこで児童が詳細に記録したデータを活用し、生活を具体的に捉え改善策を考えることを企図して生活時間調査を実施し、得られたデータを活用し、様々な視点をもたせる実践を行ない、学びを検証することにした。本研究の目的は第1に様々な地域で複数回小学生を対象とした生活時間調査を実施し、実態を明らかにすること、第2に実施した調査のデータを教材とした小学校家庭科での授業実践を行い、その教育効果を明らかにすること、第3に小学生の生活実態と発達特性を踏まえながら既存の記録用紙の改良に取り組みその効果を検証することである。

生活時間調査は都市部・へき地農山漁村部・降雪地域の5・6年生を対象に計4回実施した。平日・休日の2日間、10分毎の記録用紙に、行動を後から思い出し記入する日記方式で実施した。行動は記入を後から調査者が分類するアフターコード形式とし、収入労働時間・家事時間・生理的時間・学習時間・趣味娯楽の時間の5つの大分類として集計を行なった。

生活時間調査の結果からは以下のようなことが明らかとなった。都市部では収入労働時間がなく、平日・休日共に学校外での学習時間は長く、休日には一定数の児童が学校外の学習施設に通っていることが明らかとなった。へき地農山漁村部

では、調査時期が農繁期で児童が手伝っていたため農村地域では収入労働時間があったが、漁村部では収入労働時間はみられなかった。また農村部も漁村部も商業施設までの距離が遠いため、一人で買い物に行くことは少なく、買い物行動は日常的な行動とはいええないことも明らかとなった。降雪地域では、平日は降雪前後で大きな違いは無く、休日は降雪後に、家事の行為者率が高くなるが行動時間は短くなり、趣味娯楽では室内での活動が増えた。いずれの地域も家事時間は短く、家事参加に課題がみられた。

これらのデータを教材とし、時間を生活資源として生活を見つめ直し「自立した生活者」の育成につながる授業実践①と地域の特性を理解し「自立した生活者」の育成につながる授業実践②を行い、児童の学びを明らかにした。

授業実践①では家族との時間について考える問いかけは教師から行なわなかったにもかかわらず、児童から家族との時間についての意見が出されたことから、小学校での学習内容に気付くことができているといえる。さらに自分の生活を時間で把握することによって自分の生活特徴を捉えることができ、さらに1日の時間は限りがありバランスを捉えて生活しないといけないことに気付いていたことから、時間を資源として捉える学びができていたといえる。

授業実践2でも、家での手伝いについての意見が出され、小学校での学習内容を学べていた。さらに、学習時間や趣味娯楽の時間が都市部と異なっていることを、3・4年生の社会の学習をもとに考えていたり、家業の農家を手伝っていることを地域の産業と結びついて考えていたりするなど、地域の特徴を踏まえて自分たちの生活特徴について考えることができた。

よって授業実践では、生活時間調査のデータを教材とすることで教師からの投げかけがなくても、家族との生活について考えることができ、詳細な生活時間データからは自分自身の生活を客観的に振り返ることができ、学習のめあてに応じて適切なデータを活用することで児童の自発的な学びに結びついたり、様々な学びに結びつけたりすることができることが明らかとなった。

生活時間記録を詳細な記録は具体的な改善策を考える上で有効であったが、今回の調査は地域・季節が限定的であったため全国的かつ継続的な調査および地域別の集計が必要であるといえる。さらに授業における生活時間調査を教材とした効果についても、授業前後で生活時間調査を行なうことにより、さらに授業における学習が実生活で活用できているか検証することができると思う。また小学生の生活は家族から影響を受けていることも明らかであるために、小学生だけでなく家族の生活時間も調べ、自分の生活と比較することでより家族との生活について考えることができるといえる。自分から家族、家族から地域と考える範囲を広げ、よりよい生活を過ごすことについて考えることは、持続可能な社会の構築に結びつくために大切な学習になるといえる。